

# スキー用語の変遷

佐 藤 隆

## I. は じ め に

わが国にスキーが伝来したのは、明治30年代であるとされているが、一般に普及するきっかけとなったのは明治44年1月、高田師団においてオーストリーから赴任したレルヒ少佐が、師団の将校達を指導したことによるとされており、日本のスキー発祥は明治44年1月高田であるとされている。

以来スキーは急速に普及し、現在では約1,000万のスキー人口を有するとされ、単に競技スポーツとしてではなく、国民的レジャー・スポーツの位置を占めるようになってきている。

当初のスキー用語は、レルヒ少佐が用いたドイツ語や、スキーの母国であるノルウェー語が用いられ、そのままでは理解できなかったため、いろいろ苦労をして邦訳された言葉が用いられていたようである。スキーという言葉自体も、当時の新聞、雑誌では、雪橇、履橇、穿橇、雪艇等用具の面からの言葉と、雪滑り、滑雪等活動形式上の言葉とがあり、その混乱がうかがいしられる。技術用語に致っては直訳的用語が多く、邦訳語だけでは理解することが、極めて困難であったと思われる。

大正年代に入って多くのスキー著書が出されるようになり、ややまとまった用語が用いられるようになってきた。ただしこれらの著書は、ヨーロッパの技術論争の影響で、原著により当然訳語も異り、邦訳困難のために原語を片仮名で示した場合も、著者により相違がみられた。

公式用語とされるものは、大正12年の第1回全日本スキー選手権大会開催により、競技規則が制定されて、競技に関する用語がまとまりをみせるようになったことが、はじまりである。しかし、一般的な技術用語は流派によって異り、更に個人によって異なるという有様であった。

昭和13年、全日本スキー連盟が、はじめて“一般スキー術要項”を刊行したことにより、用語の統一が期待できるようになったが、戦時体制の影響を受けて外国語使用が制限され、昭和19年の日本体育会編“戦技スキー読本”では片仮名の用語は少例に止まっている。

戦後スキーの復興はめざましく、昭和22年には復活第20回全日本学生スキー選手権大会が小樽で開催され、全国的規模のスキー行事復活第1号となった。以後戦前のスキー行事は全て復活し、更に新しい行事の発足や、一般スキーヤーの増大もあって、めざましい発展をみるようになった。ただし敗戦により、欧米諸国との交流が禁止されていたため、その事情がわからず、僅かに入手できた資料によって紹介されたフランス、オーストリーの技術論争に興味を持つだけであった。用語についても、戦前のスキー技術書で用いられた用語がそのまま用いられ、ヨーロッパの現状について知り得た人達の論文等で、少数の新しい用語が使われる程度であった。

戦後日本の一般スキー界に最初の大きな影響を与えたのは、昭和29年来日したフランスのピエール・ギョーとアンリ・オレイエである。フランス・スキー術については既に図書、雑誌で紹介されていたが、まのあたりに見るオレイエの華麗なテクニックは日本のスキーヤーを魅了した。この結果スキー場にはフランスのスキー用語が汎濫した。しかしフランス・スキー術の命運は短かく、昭和31年のスコーパーレーにおけるザイラーのアルペン三冠王の成績にみられるオーストリー勢の抬頭と、32年のルデイ・マットの来日によって、日本のスキー界はフランスからオーストリーへと一気に塗りかえられた。用語も目新しいドイツ語がスキーヤーの口にのぼるようになり、引続いてクルッケンハウザー教授やデモンストレーション・キングといわれたフルトナー等の来日によって、オーストリー・スキーは日本に確固たる位置を占めた。爾来今日まで

わが国の一般スキーは、オーストリー・スキーの影響を受けて発展してきたが、世界スキー教育者会議（インター・スキー）参加を重ねるなど、世界のスキー事情が明らかにされるとともに、わが国独自の技術の開発や指導体系の確立が叫ばれるようになってきた。昭和46年刊行された曲進系技術を中心とした“SAJスキー教程”や48年に出された“日本スキー教程”はそのあらわれである。しかしこれらは、新しい技術ということで従来なかった用語が使用されたり、世界共通語ということで英語にまとめるといった操作がなされたため、用語の混乱がおり、一層難解なものになった。

世界スキー教育者会議では、各国バラバラな用語がスキー技術を混乱させているとして用語研究委員会を発足させている。つまり世界のスキー技術は近づいており、国の名前を冠したスキー術などは存在しえないという共通の理解にたつて、用語の統一をはかろうとしているのである。勿論これは、すべてを一個国語に統一しようとするものではなく、ある技術をあらわす各国の言葉について、共通の解釈がされるようにしようとするものである。このような段階にあって、わが国のスキー用語はいかにあるべきであろうか。欧州各国の言葉を無統制に使用し、そしてそれらの訳語として同じ意味のものを違う言葉にし、同じ訳語であっても意味が違うといった混乱は、何とかして避けなければならない。

そのためには、過去の用語の変遷をたしかめ、それらの中から日本人に素直に採用された原語や訳語を選び出し、世界スキー教育者会議での用語研究委員会の決定にあてはめる準備をしておかなければならない。

## II. 日本におけるスキー技術用語の変遷

大正年代からのスキー図書及びSAJから刊行されたスキー年鑑及び一般スキー教程を中心にして、技術用語を集録してみた。

年代別は日本スキー史の中で、一般スキーの転機となった事態が、昭和10年代、20年代、30年代、40年代とみられることから一応次の表のような分類を試みた。表の中では、大体同一の意味を持つ言葉をまとめ、その変化を年代別に横に並べた。これによって一応用語の変遷をうかがい知ることができると考えた。

スキー技術用語の変遷一覧表

年代 技術	~ S.10	S.11 ~ S.20	S.21 ~ S.30	S.31 ~ S.40	S.41~
平地での歩行, 滑走	平地行進 平地滑走, 駈歩 二段滑走 二歩滑走  三段滑走 三歩滑走 推進滑走 用杖推進滑走 躍進滑走 パスカング  スケーティング滑走 スケイト滑走 スケート滑走	普通滑走 二段滑走 急動荷重滑走 二歩滑走 三段滑走 三歩滑走 推進滑走 両杖推進滑走 躍進滑走 パスカング 片脚荷重滑走 一歩一杖滑走 スケート滑走	二歩滑走  三歩滑走  パスカング  スケート滑走	滑歩 滑走 一歩滑走  推進滑走  変形パスカング  スケーティング	平地歩行 平地滑走 段滑走  推進滑走  パスカング  スケーティング
方向変換	停止間の廻転 方向変換 開脚廻転 開脚方向変換 横向(法)	方向変換  踏み換え 側転向 半右(左)向	方向変換  踏換ターン	方向変換  踏みかえ 前開きターン 後開きターン	方向変換  踏みかえ

	横向方向変換 横向踏換へ 蹴上廻転 キック・ターン 後向(法) 後向方向変換 後向踏み換へ 蹴上方向変換 二段式転換法 置き換へ 跳躍廻転 跳躍方向変換 弓状方向変換	右(左)向 斜転向 キック・ターン 後向180° 後転向 置換へ  跳躍廻転	踏み換へ方向変換 キック・ターン	キック・ターン  後ろまわしターン 前まわしターン	前まわし (キック・ターン)  後ろまわし
登行法	登行 開脚登行 開脚登 魚骨形登行 半開脚登 半魚骨形登 横登り 階段登 楷段登行 横登行 横向登行法	登行 開脚登行  半開脚登行  階段登行  斜階段登行	登行 開脚登行  階段登行	登行 開脚登行  階段登行	登行 開脚登行  階段登行

	半横登り 斜横登行 斜楷登行 変型階段登行 電光形登 直登行 直行登 叩き付け登行 擲付登 斜登行 斜向登 角付登	斜階段登行 横移登  電光形登行 直登行 前移登 擲き付け登行  斜登行 斜移登 斜切込み登行	斜階段登行  ジグザグ登行 直登行  叩き付け登行	直登行  斜登行	斜登行
滑降	直滑降  斜滑降 全制動  両脚制動滑降法  ブルーク・ファーレン 犁雪滑降  半制動 シュテム・ファーレン	直滑降 両脚平均荷重滑降 斜滑降 全制動  全制動滑降  半制動 半制動滑降	直滑降 直線滑降 斜滑降 全制動  V字滑降  半制動 片開きV字滑降	直滑降  斜滑降 ブルーク・ファーレン  スノー・ブラウ ハの字すべり	直滑降  斜滑降 ブルーク  ブレムス・ブルーク グライト・ブルーク 伸ばしブルーク 屈指ブルーク

	横滑 横降り 用杖制動 杖制動 股間制動滑降 クリスチャニア制動 テレマーク制動 脛坐制動	片脚荷重滑降 横滑	横すべり デラバージュ 不整地滑降	横すべり ザイトルツェン 不整地滑降	横すべり 不整地滑降
回転	全制動廻転 犁雪廻転 純制動廻転 ブルーグ・ボーゲン 半制動廻転 下向制動廻転 制動廻転 ステム・ボーゲン 半制動廻転 持上げ制動廻転  ステム・クリスチャニア 下向クリスチャニア クロズド・クリスチャニア	全制動廻転 両制動廻転 両脚荷重廻転 ブルーグ・ボーゲン シュテム・ボーゲン 片脚制動廻転 用杖制動廻転  L. S. T.  シュテム・クリスチャニア シェーレン・クリスチャニア	全制動廻転 基礎廻転 V字廻転 ブルーグ・ボーゲン 制動廻転 ステム・ボーゲン  踏換えクリスチャニア シュテム・クリスチャニア ベラスティ 小開きクリスチャニア	ブルーグ・ボーゲン ハの字回転  シュテム・ボーゲン  シュテム・クリスチャニア ステム・ターン シュリッツ・ターン ブルーグ・クリスチャニア	ブルーグ・ボーゲン   シュテム・クリスチャニア シュテム・ターン ブルーグ・クリスチャニア ブルーグ・ターン

<p>シェーレン・クリ スチャニア          鉋形クリスチャ ニア          跳躍廻転</p> <p>ジャンプ・ター ン クエア・スプル ン グ          シュトック・ター ン          浮動クリスチャ ニア          ライネ・クリスチャ ニア          平行クリスチャ ニア          純粹クリスチャ ニア          ビューア・クリ スチャニア          クリスチャニア廻 転          急動クリスチャ ニア          チャーグド・クリ スチャニア</p>	<p>跳躍廻転</p> <p>両脚抜重廻転</p> <p>純粹クリスチャニア</p> <p>平行クリスチャ ニア</p>	<p>鉋形クリスチャ ニア          山廻りクリスチャ ニア          跳躍廻転</p> <p>並行クリスチャニア</p> <p>平行クリスチャ ニア          純粹クリスチャ ニア</p>	<p>オープン・ター ン          山まわりクリスチ ャニア          ジャンプ・ター ン          エア・ター ン</p> <p>パラレル・クリス チャニア          ビューア・クリ スチャニア</p>	<p>谷開きターン</p> <p>山まわり</p> <p>ジャンプ・クリスチ ャニア          ジャンプ・ター ン          エア・ター ン</p> <p>パラレル・ター ン</p> <p>パラレル・クリ スチャニア</p>
---	--	---	--	--



	ゲリッセネ・クリ スチャニア スチャード・クリ スチャニア 尻尾振り (tail-wagging)	蛇行斜滑降	反復小曲り斜滑降 斜めくらげ	ウエーデルン 連続小廻り回転 クルツ・シュブン グ 片斜面連続山まわ りクリスチャニア ジュテム・ギルラ ンデ パラレ・ルギルラ ンデ シュテム・ウエー デルン	ウエーデルン マンボ ツイスト  小人ターン  ロイヤル・ターン  ギルランデ
	ステップ・ターン 踏換廻転	踏み換へ廻転	ステップ・ターン	ステップ・ターン  ウムシュタイク・シ ュブング	ステップ  ステップ・ターン
	テンポ・シュヴング テレマーク 制動テレマーク ステップ・テレマ ーク	テンポ・シュヴング テレマーク 片脚荷重廻転	テレマーク	テレマーク・ターン	
その他	滑痕				

	<p>シュプール 屈身姿勢 正規姿勢</p> <p>テレマーク姿勢</p> <p>ゲレンデ跳躍 ゲレンデシュプリ ンゲン トレッケ・ホップ 前傾</p>	<p>ホッケ姿勢 「く」の字型</p> <p>前倒</p>	<p>外傾姿勢 リュアド</p> <p>蹠趾球荷重</p> <p>屈身抜重 伸身抜重</p>	<p>くの字姿勢 アンギュレーショ ン コンマ・シュテル ンク ヒュフトクニック フェルゼン・シュー プ 押し出し ひねり押し出し 立ち上り抜重</p> <p>チェック ゲレンデ・シュプル ンク ブレ・ジャンプ</p>	<p>立ち開き 平踏み先落し</p> <p>抱え込み送り出し</p> <p>蹴り出し かい込み</p> <p>両足均等荷重 押し開き ポイゲン, シュトレ ッケン 抵抗解放 重心先行</p> <p>ブレ・ターン</p>
スキー術	<p>リリエンフェルド・ スキー術 アールベルグ・スキ ー術 コールフィールド派</p> <p>カンダハー派 ノルウェー派</p>	<p>前外傾技術</p> <p>テンボシュヴンク</p> <p>フランス派</p>	<p>フレンチ・メソッド</p> <p>ローテーション技術</p>	<p>オーストリー・テク ニック バインシュピール テクニック シュープ・テクニ ック</p>	<p>ブライツ技法</p> <p>ペーレン・テクニッ ク 曲進系</p> <p>ステップ系 G. L. M.</p>

### III. 用語の変化の経緯

上記一覧表により、技術類別に年代を追ってその変化を調べてみよう。

#### 1. 平地での歩行・滑走

平地での歩行・滑走技術は一般スキー技術の基礎であるとともに、距離競技の技術でもある。これらは早くから邦訳がなされ、あまり変化していない。ただ“パスカング”及び“スケーテング”は適当な訳語がみつからなかったためか(“パスカング”は“躍進滑走”という言葉が戦前に大分用いられてはいるが)、そのまま片仮名で用いられている。又パスカングは、同側の手と足を同時に前に出す動きであることから名付けられたものであるが、その後歩行と同様の動きの走法があらわれたことから、“純粹パスカング”、“変形パスカング”の区別があらわれた。現在のパスカングは後者の型を示すものになっている。段及び歩が用いられる滑走法では、リズムを主とする“段滑走”と、歩数による“歩滑走”が、同じ数字では違う形になるため一時混乱したことがある。最近の一般スキーでは滑走法をほとんどとり上げないため、あまり問題にならず、競技で用いられている“段滑走”だけが使われている。

#### 2. 方向変換

停止間に方向を変える技術としては、スキーの前開き、又は後開き動作を連続する方法と、一挙に180°向きを変える方法があって、方向を主とするか、動作を主とするかで名称が異なる。この技術について問題になるのは、S. 31～S. 40年代において、スキーの動きを主とする“踏みかえターン”と“キック・ターン”が用いられていたのにS. 48年の日本スキー教程では、ターンはスキーを平行に揃えて行なう廻転(従来のクリスチャニア)と限定したために、ターンという言葉が使用できなくなり、“キック・ターン”を単に“前まわし”という表現のわかりにくいものにしたことがあげられる。又、S. 30年代の“前まわし”は一方のスキーの先端を支持脚の前方から廻し込んで180°方向変換する方法であるので、前述の“前まわし(キック・ターン)”とは全く別の操作である。

### 3. 登行法

登行法では、動作時のスキー位置及び方向によって用語が作られている。最近のスキーが搬器の発達にともなってあまり登行をしなくなったことにより、登行技術も簡略化されている。又昔はシュタイグ・ワックス使用により、緩斜面であれば平踏みで直進できたが、最近のスキーではそれが不可能で、結果として“直登行”は殆んど用いられず、“斜登行”は以前の“斜階段登行”のことを指すようになっている。

### 4. 滑降

同一方向への滑降技術で、フォール・ラインに沿ってスキーを平行にして滑るものを“直滑降”，フォール・ラインを横切って斜面を斜めに滑るものを“斜滑降”とする。進行方向に対してスキーが角度をもっておかれる場合、両スキーをハの字型に開いたものを“ブルーク”とし、両スキーを揃えて真下又は斜め前や斜め後ろに横ずれをして滑るものを“横すべり”という。片方のスキーのテールを開いた形をシュテムといい、この形で直線的に滑降することを“半制動”又は“シュテム・ファーレン”といったが、最近ではシュテムの形は回転の初期にだけ用いられるようになり、用語としては使用されなくなっている。

“ブルーク”の訳語として、戦前は“全制動”という言葉が用いられたが、その後制動という意味が薄くなった段階で、V字、逆V字、ハの字等用いられたが、何れも適当でなかったため結局“ブルーク”という言葉になった。“横滑り”はS.30年頃、フランス・スキー術の最盛期、“デラパージュ”がそのまま用いられたが、その後オーストリー・スキーの流行により、“ザイトルッチェン”に変わった。しかし“横滑り”という言葉がわかりやすい点もあって、現在これに落ち着いている。

### 5. 回転

一般スキー技術の中心をなす回転技術については、用語も多く、又スキー術の変遷にともなって、同一技術についていろいろな用語が用いられている。回転技術の分類のしかたには、いろいろあるが、回転時の両スキーの形によるも

のが一般的であるので、それによって分類を試みた。

第1に両スキーをハの字型に行なうブルーク型回転，第2に回転の初期に片スキー又は両スキーのテールを開き，後半両スキーを揃えて回転するシュテム型回転，第3に最初からスキーを揃えて回転するパラレル型回転，第4に初め回転外側スキーを踏み出し，残った内スキーを揃えて回転するステップ型回転の4つに分類することができよう。

第1の型の回転は，古い用語で“全制動回転”，現在の“ブルーク・ボーゲン”がこれである。第2の型は，“ステム・クリスチャニア”や“シュテム・ターン”がこれにあたる。第3は，“ライネ・クリスチャニア”，“平行クリスチャニア”，“純粋クリスチャニア”，“跳躍回転”，“ジャンプ・クリスチャニア”，“パラレル・クリスチャニア”，“パラレル・ターン”等がこれにあたる。第4の型としては，“ウムシュタイク・シュブング”や“ステップ・ターン”がある。

これらの用語は夫々同一技術を意味するものと考えてよいが，流派により，又時代によって，厳密に比較すれば違った解釈がなされる場合が多い。

一覧表の上で，最も注目すべき変化として，“半制動回転”，“シュテム・ボーゲン”という技術が，昭和30年代でなくなっていることと，逆に昭和30年代から“連続小廻りクリスチャニア”，“ウェーデルン”というスピードある連続小半径回転の現われたことである。又前に述べたように，昭和48年以來，S. A. J. スキー教程で，従来のクリスチャニアと称したものを，一さいターンと変えたため用語上の混乱のおこったことも特筆すべき点である。この後者の変化のため，平地での前開き踏み換えと同じ動作を，滑降しながら行なうものを“ステップ・ターン”と称していたが，上述のターンの意味が変えられたため，単にステップと称するようになり，“ステップ・ターン”は“ウムシュタイク・シュブング”を指すようになったのである。

## 6. その他

その他として，技術に関する用語では，滑降・回転時の姿勢，抜重・荷重に関する用語，上体や下肢の動作，エッジ操作等についてさまざまな言葉が現われている。一般的に技術用語は簡略化される傾向にあるが，最近の技術論

からは、上記に関する技術分析がなされて、むしろ複雑化する傾向がみられる。昭和46年 S. A. J. のスキー教程にあらわれた曲進系技術にみられる“平踏み先落し”や“抱え込み送り出し”、“蹴り出し”、“かい込み”、“抵抗解放”、“重心先行”などはその例であろう。

## 7. スキー術

ツダルスキーのリリエンフェルド、スキー術以来、数多くの何々流、何々派と称するスキー術が現われたが、主なものを年代別にまとめてみた。これらは当然用語の変遷に大きなかわりあいを持つもので、特に国の名前をつけた技術体系があらわれると、用語が一挙にその国の言葉に変わることにすらあって、用語混乱の大きな原因となった。

## IV. ま と め

以上資料による一覧表をみるに、わが国にスキーが渡来して以来65年、難解なスキーの原語を適当な日本語に訳すべく、多くの人々が努力してきたことがわかる。それにもかかわらず、適当な訳語を見出せないまま原語が使用されている例も多い。スキーが古来からわが国に存在していたものであれば、双方を比較することで邦訳することは容易であろうが、全く存在していなかったものについて新しい言葉を与えるのであるから、一層困難なものになったと考えられる。

現在の S. A. J. “日本スキー教程”において、技術用語は普遍性を求めるという理由で、ドイツ語、ノルウェー語を英語にあらためる操作がなされたが、普遍性とは何か、もう一度考える必要がある。

日本語に訳した場合、その意味が正しく表現されていれば、それが最も適当であろう。もし適当な訳語が見つからない場合は、当然原語を用い片仮名で表わすことになるが、それはその言葉の原典をたずねてそのまま用いるか、又は他の外国語に訳されて、永年にわたり他の諸国でも用いられている場合に限って、その訳語を用いるようにするべきであろう。又新しい技術用語を作製する場合は、その技術と同じ技術が過去においてあったかどうか確かめてから名

附けないと、混乱の基になるおそれがある。

スキー用具の発達や、スキー場環境の変化は、確かに新しいスキー技術を発達させたが、基本的要因の大半は、近代スキー発生（リリエンフェルド・スキー術）以来、殆んど変わっていないということを考えるべきであろう。

今回の研究は、日本のスキー用語の変遷を調べることで、問題点を明らかにするとどまったが、今後個々の技術用語について、その適否を検討し、否である場合、代わるものを求める研究をすすめてみたい。

#### 参考文献

- |                       |                   |
|-----------------------|-------------------|
| 図解最新スキー術              | (T.12) 渡辺・大内      |
| スキーとスケート              | (T.13) 鉄道省        |
| スキーイング教程              | (T.13) 帝国大学スキー山岳部 |
| スキーイング                | (T.13) 笹川速雄       |
| 山岳スキー                 | (T.13) 平井左京       |
| スキー競技法                | (T.14) 西沢勝次       |
| スキーイング初歩              | (T.15) 東京帝大スキー山岳部 |
| スキー術手ほどき              | (S.4) 六花倶楽部       |
| アールベルグスキー術            | (S.4) 高橋次郎        |
| 最近のスキー術               | (S.4) 小秋元隆邦       |
| シュナイダーは語る             | (S.5) 坂部護郎        |
| スキー・スケート              | (S.5) 朝日新聞社       |
| シュナイダーとア<br>ールベルグスキー術 | (S.5) 玉川学園        |
| スキーの理論と技術             | (S.6) 東京帝国大学山の会   |
| 実用スキー術                | (S.6) 長田進         |
| 山野スキー術教本              | (S.6) 水野祥太郎       |
| スキー術指導法               | (S.6) 桜庭留三郎       |
| スキー                   | (S.7) 泉掬次郎        |
| スキーの新研究               | (S.7) 中川新         |
| 雪・女性とスキー              | (S.8) 黒田米子        |
| スキー指導及研究              | (S.8) 和田利彦        |
| 山スキーの技術               | (S.8) 長田進         |
| ゲレンデ・スキー              | (S.9) 河上・中川・宮川    |
| 最新のスキー術               | (S.9) 高橋健治        |
| 山岳スキーの旅               | (S.9) 竹節作太        |
| スキーテクニック              | (S.10) 高橋健治       |

日本のスキー術	(S.10) 高橋次郎
一般スキー術	(S.11) 各務良幸
新スキー術	(S.13) 馬場忠三郎
日本スキー術	(S.13) 吉田貞治
銀界三十年	(S.13) 稲田昌植
スキー術入門	(S.14) 小島六郎
一般スキー術要項	(S.14) S. A. J.
戦技スキー教本	(S.19) 大日本体育会
スキー廻転技術	(S.22) 高橋次郎
私たちのスキー	(S.23) 猪谷六合雄
スキー	(S.25) 野崎彊
一般スキー術	(S.22) S. A. J.
一般スキーテキスト	(S.27) S. A. J.
スキー講座 I. II. III.	(S.30) 猪谷等
正しいスキー術	(S.32) 沢本三郎
スキー教程	(S.38) S. A. J.
スキー教程	(S.41) S. A. J.
SAJスキー教程	(S.44) S. A. J.
SAJスキー教程	(S.46) S. A. J.
日本スキー教程	(S.48) S. A. J.
スキー年鑑第1号～第48号	S. A. J.